東京家政学院大学紀要　第 43 号　2003 年　人文・社会科学系　抜刷
（2003 年 8 月発行）

神奈川県海老名市大谷市場遺跡の発掘調査

― 平成 13 年度考古学実習の成果より ―

三　宅　　裕　　田　尾　誠　敏

神奈川県海老名市大谷市場遺跡の発掘調査
－平成 13 年度考古学実習の成果より－

三　宅　　裕　　田　尾　誠　敏*

１．はじめに

東京家政学院大学人文学部日本文化学科では，野外実習のひとつとして考古学実習をカリキュラムに取り入れている。この授業を平成 12 年度より筆者らが担当しているが，平成 12 年度は神奈川県川崎市末長遺跡群で実施された開発に伴う広い面積の発掘調査の一角を間借りする格好で実習を行った。平成 13 年度は神奈川県海老名市大谷市場遺跡で，実習のための単独の発掘調査を実施することができた。

大谷市場遺跡は，すでに平成 12 年 12 月 18 日から平成 13 年 10 月 30 日にかけて，土地区画整理事業にともなう発掘調査が約 11,000 ㎡という広い面積で行われていた。この発掘調査では，縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が多数発見されており，その中心は 7 世紀から 8 世紀にかけての古代であった。この区画整理事業に付帯して，事業地に続く道路を拡幅する工事と，その工事の影響で防火水槽を移築する工事がもちあがった。海老名市教育委員会による試掘調査の結果，それぞれの地点において事前の発掘調査が必要であるとの判断がされた。このうち防火水槽部分の発掘調査は，約 50 ㎡と比較的まとまった面積があるため実習には手頃であると考え，実習担当者のうちの田尾が発掘調査団を組織する形式で海老名市教育委員会と委託契約を結び，本実習を受け入れるという体裁をとった。

なお，この実習に伴う発掘調査の後，平成 14 年度には海老名市教育委員会によって道路拡幅部分の発掘調査が実施されている。このことから，区画整理事業に伴う発掘調査を第一次調査，防火水槽移築に伴う本発掘調査を第二次調査，海老名市教育委員会が行った道路拡幅部分の発掘調査を第三次調査と呼ぶことにする。

以下，本稿では発掘調査の概要と成果について述べることとし，併せて実習の状況と課題についても触れることとしたい。

２．発掘調査と実習の経過

先述したように，発掘調査にあたっては田尾が大谷市場遺跡第二次発掘調査団を組織し，海老名市教育委員会との間で委託契約を結ぶ形式を取った。委託契約には 312,670 円の業務委託料が海老名市より支出されたが，これは，表土掘削・埋め戻し・仮囲い設置に関わる重機使用料および作業員の人件費・仮設トイレのレンタル料・調査用具および消耗品の購入・フィルム現像料等に全て使用した。

発掘調査に関わる事務処理に関しては，文化財保護法第 57 条に基づき，発掘調査担当者承諾書・土地所有者の発掘調査承諾書を添えて埋蔵文化財発掘調査届を，海老名市教育委員会を通じて神奈川県教育委員会に平成 14 年 1 月 23 日付で提出した。なお，文化財保護法第 57 条第 1 項の規定にある発掘調査着手 30 日前までに届出ができなかったため，遅延理由書を添えておいた。これに対しての許可通知は，平成 14 年 2 月 6 日付の神奈川県教育委員会教育長名で回答されている。

大谷市場遺跡の第二次発掘調査は，考古学実習の日程を中心に設定して，平成 14 年 2 月 4 日から 2 月 20 日までの 17 日間，休日なしで連続して行った。初日の 2 月 4 日には調査区を設定し，仮囲い・仮設トイレの設置，表土の掘削を行った。

5 日より実習を開始。実習は 1 班 10 ～ 12 人程度で 4 班を編成し，1 班 3 日を原則として行っ

人文学部日本文化学科
* 東京家政学院大学非常勤講師

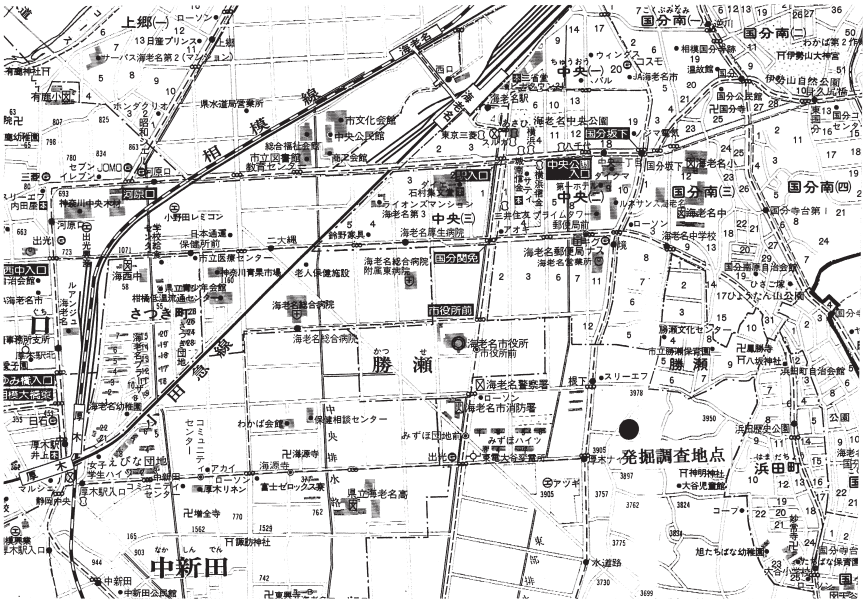

図１　遺跡位置図（1/20,000）

た。従って実習は２月16日まで行ったことになる。しかしながら，実習期間中に全ての作業が終了しなかったために，実習生有志によって発掘調査を継続し，２月19日に発掘調査が終了した。

防火水槽の移設工事は次年度の８月に予定されているために，２月20日に一旦発掘調査地の埋め戻し作業および仮囲いの撤去を行い，現地での作業を全て終了した。現地作業終了後の２月23日に，仮設トイレなどの撤去，出土遺物の数量確認などを行って，全ての予定を終了した。

発見した遺物は，調査終了後に遺失物法第１条第１項の規定に基づき出土文化財発見届を所管の海老名警察署に提出すると共に，出土文化財保管証を神奈川県教育委員会に提出した。この届出によって神奈川県教育委員会が埋蔵文化財の認定を行い，海老名警察署に通知している。

３．大谷市場遺跡の立地と環境

神奈川県海老名市は，神奈川県の県央部にあり，相模川に面する左岸に広がっている。市の中心である海老名駅は，ＪＲ相模線・相模鉄道・小田急電鉄が乗り入れており交通が至便であるため，近年には高層マンションなどの集合住宅の建設や，海老名駅前の再開発などが行われ，最近とみに賑やかとなった地域でもある。

大谷市場遺跡は，海老名市の中心地に近い海老名市大谷字市場一帯に所在し，海老名駅の南東約1.5kmに位置する。遺跡は高座丘陵南端部の西側斜面に立地し，東接して古代東海道の浜田駅に近接する集落と考えられている上浜田遺跡がある。第一次調査区は標高30～50ｍの部分にあり，第二次調査区はそこからさらに西に下った標高約27ｍの部分にある（図１）。後に実施された第三次調査区は，第二次調査区の東西約120ｍにわたる断続的な細長い調査区を呈している。

第一次調査区に続く道路の拡幅が計画された際に，計画に先立ち海老名市教育委員会が試掘調査を実施した。その結果，計画範囲内に縄文時代を中心とする遺構・遺物の存在が明らかとなった。特に，４か所設置した坪掘りトレンチのうち旧防火水槽に近い第３グリッドでは，縄文時代中期の遺物包含層と土器の集中する箇所が確認された。このような結果を受けて，防火水槽設置予定箇所の発掘調査を，考古学実習に合わせて前倒しして実施することとなったのである。

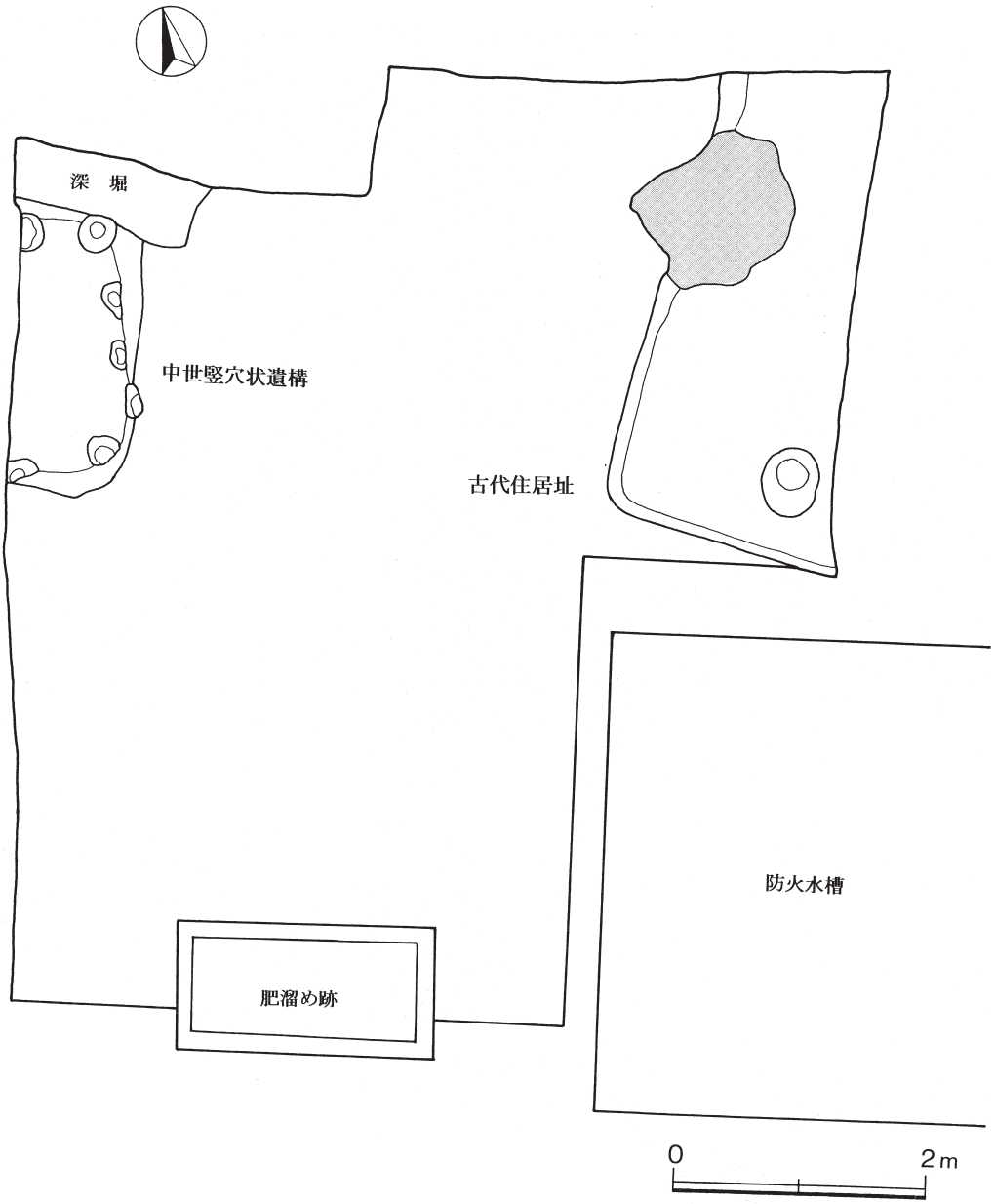

図２　古代・中世遺構全体図（1/60）

４．発掘調査の概要

発掘調査ではまず，試掘調査の結果を考慮しながら表土の掘削を行った。調査前の地表面の現状でも，調査区全体が北東から南西に向かって傾斜している様子がわかった。このことを踏まえて，北東側で約 140cm・南西側で約 30cm を重機を用いて徐々に掘削していった。およそこの面から縄文土器の散布が目立ち始めた。また，同様の面で古代の竪穴住居址のカマドを確認した。さらに，縄文時代の包含層を掘り下げ途中に，中世に属する竪穴状遺構を確認した。以下，発見した遺構と遺物の概要を時代毎に述べる。

1．古代住居址全景

2．古代住居址カマド

3．中世竪穴状遺構

写真１　古代・中世遺構

１）古墳時代後期の遺構と遺物

竪穴住居址

重機による最初の掘削面で，竪穴住居址カマドの焼土分布と土師器の散布を確認した。しかしながら，住居址の全体的なプランがわからなかったので，カマド部分の焼土を掘り広げていき，床面を確認することにした。その結果，住居址の全体像が明らかとなり，カマドを中心とする一部分が調査区内にかかり，その他の部分は調査区外に広がることがわかった（図２，写真１－１）。

竪穴住居址は，遺構確認面までの壁高の残存が50cm 強あり，特に床面とカマドの遺存状況は良好であった。床面は，ローム質の粘質土によって固く貼り締められていた。南西コーナーに近い床面ではピットが１基見つかっており，柱穴に相当するものかもしれない。壁際の周溝は確認されなかった。カマドの煙道は後世に削平を受けていたものの，カマド本体は袖の先端部分に土師器甕を倒置して埋め込んでおり，カマドの補強材として利用していた様子がよくわかった（写真１－２）。

竪穴住居址の覆土から出土した当該時期の遺物量は少なく，ほとんどが二次的に混入した縄文土器であった。その中でも復元実測が可能なものを，図３に呈示した。１は黄褐色の胎土と軟質の焼き上がりをした，在地の土師器坏である。口縁部は短く，直下に１条の沈静を施し，器形はやや深身の丸底である。２は暗茶褐色の色調で，硬質の焼き上がりをした土師器坏である。半球形に近い丸

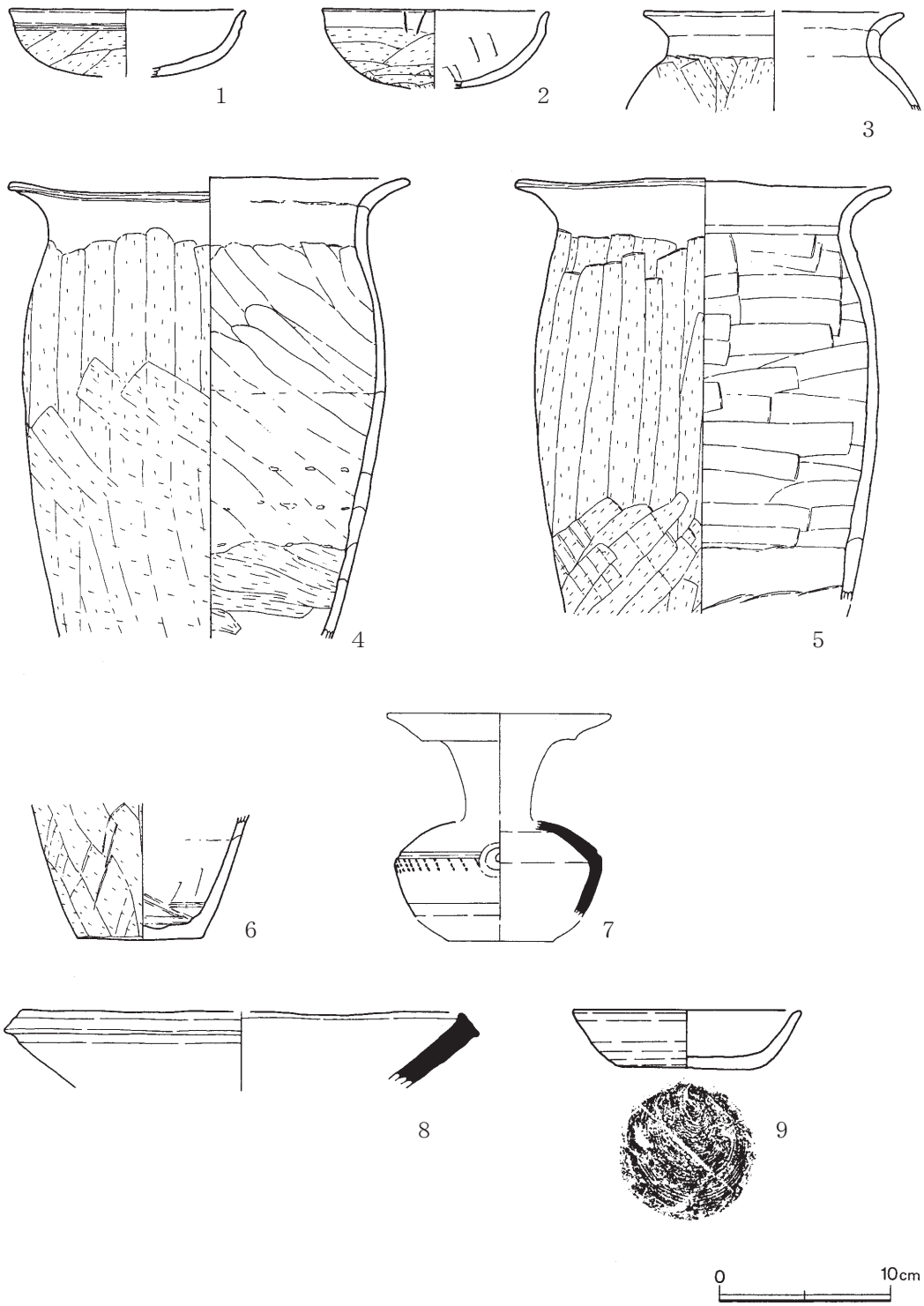

図３　古代・中世遺物（1/4）

底の器形を呈し，７世紀後半頃に関東地方で拠点的に分布する，いわゆる「新型坏」が他地域から搬入されてきたものであろうか。３～６は土師器甕で，いずれもヘラケズリ整形が施されている。３は小型でやや胴部が張る形態のものであろう。４・５はカマドの補強材として左右の袖に埋め込まれていたもので，長胴を呈する。６も土師器長胴甕で，底部である。カマド脇の小ピットから出土しているので，４・５のいずれかと同一個体である可能性もあろう。７は須恵器の瓹の小破片を復元したものである。肩部に沈線を１条めぐらせ，その直下に櫛歯状の刺突列を配している。穿孔部は外側に盛り上がって突出しており，瓹の末期形態の特徴をよくあらわしている。これらの土器群は，７世紀代中葉から第３四半期頃の所産であると考えられる。

２）中世の遺構と遺物

竪穴状遺構

重機による最初の掘削面から，約30cmほど掘り下げた面で確認した。覆土の上層は，縄文時代の遺物包含層と似通っていた。同質の土によって埋め戻されたのかもしれない。さらに遺構内を掘り下げたところ，覆土にしまりの弱い部分やローム・ブロックを多量に含む層などがあり，最終的に底面はローム層まで達していた。遺構確認面から底面までは，約65cmの深さがあった。遺構の南北は約235cmを測るが，西半分は調査区外となるため東西の規模は不明である。掘り方底面の壁際に小穴を配するが，多くが遺構の中心に向いて傾斜している（図２，写真１－３）。

こうした形状の遺構は，中世都市鎌倉を中心としてよく見られる，方形竪穴建築址と呼ばれる遺構であろうと考えられる。馬淵和雄氏によると，都市鎌倉においては「方形または長方形を平面形態の基本とし，長辺・短辺とも180cm以上の規模を持ち深さ30cm以上で，２軒以上連接しないこと」と定義されており，古代の竪穴住居と異なってカマドは付設しない。また斎木秀雄氏は，規模の大小や付属施設等で３分類している。本遺構はその中で，一辺が３m前後かそれ以内の小規模で深さも１mを超えずに浅く壁際に柱穴を持つことが多いⅢ類とされる類型にあたる。方形竪穴建築址は，鎌倉地域では13世紀後半から14世紀末頃までの約100年の間にしか存続しないことがわかっている。本遺構も，そのぐらいの時間幅で捉えておきたい。なお，方形竪穴建築址の用途としては，居住用のほかに倉としての機能も考えられている。

本遺構から出土した遺物の大半は，やはり二次的に混入した縄文土器である。唯一，当該時期に属する遺物として，図３－８に挙げた渥美窯産と思われる陶器の捏鉢が出土している。図３－９は土地所有者の山口智氏から寄贈された大振りのカワラケであるが，調査区に隣接する敷地内から農作業中に出土したものであるという。やはり，竪穴状遺構や捏鉢に近い年代の所産であろう。

３）縄文時代の遺構と遺物

Ａ区土器集中部

海老名市教育委員会が行った試掘調査時に確認された，土器集中部に連続するものと考えられる。重機による最初の掘削段階から，この部分については土器片が著しく集中していると感じた。縄文時代の遺物包含層全体を掘り下げていった際に，土層堆積観察用のベルトを残して調査区を４区画に分けてＡ区からＤ区までの名称を付けたので，この部分をＡ区土器集中部とした。遺物を残しながら包含層を掘り下げたところ，この部分は包含層全体でも極端に土器が集中しているということがわかり，当初は住居址などの遺構が存在することも予測された（図４・５，写真２－２）。しかしながら上面確認では，遺構の掘り込みや土質の違いなどが明らかにはならず，遺物を残してさらに掘り下げることとした。そうしたところ遺物の分布自体が南西に傾斜しており，特に調査区南西隅の再深部では完形に近い個体や大型の破片が集中していた（写真２－３・４）。

遺物を取り上げた後に，西側壁面に沿ってサブ・トレンチをあけて遺構の有無を確認した。これによって，遺物を包含する土層が南に向かって傾斜している堆積状況が確認され，貼床や焼土といった居住遺構に関係するような痕跡は確認できなかった（図５下段断面図）。なお包含層の直下には，

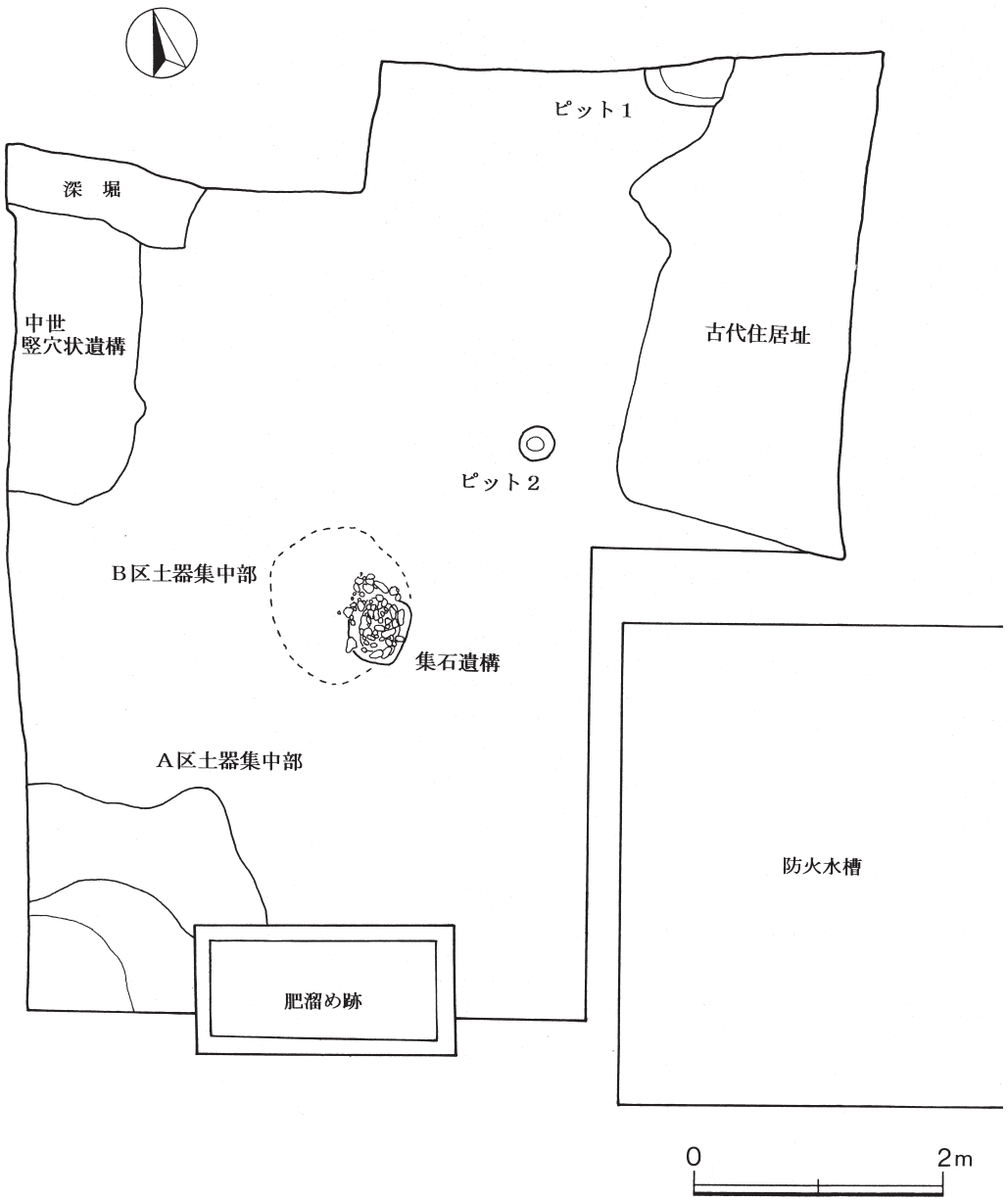

図４　縄文時代遺構全体図（1/60）

遺物をほとんど含まない暗～黒褐色土の富士黒土層（ＦＢ）に比定することのできる堆積が確認できたが，混入物が含まれたり，ブロック状に崩れたような堆積を示すので，斜面地での流れや二次的な堆積を考慮する必要があろう。またサブ・トレンチはローム層まで掘り抜いたが，富士黒土層の下はL_1Hと思われるハード・ローム層で，ソフト・ローム層（L_1S）が流出している可能性がある。以上のことからＡ区土器集中部は，谷状の落ち込み部に土器を廃棄した，捨て場遺構であろうと考えられる。

出土した遺物の多くは縄文土器であるが，それ

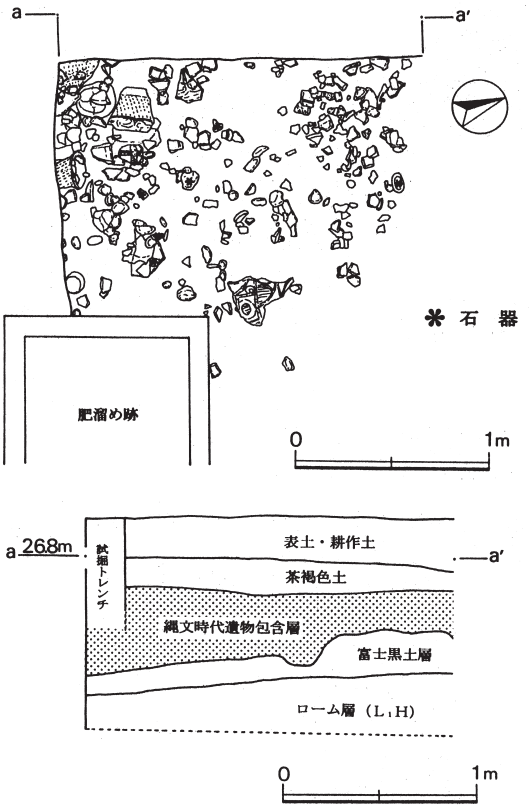

図５　Ａ区土器集中部平面図・断面図（1/40）

らの文様構成や器形などの属性から，いずれも縄文時代中期勝坂式のうちの井戸尻式期に含まれることがわかった。そのうちの略完形で全容がわかるものを図６・７に呈示した。１は井戸尻式期に盛行する円筒形の深鉢形土器である。胴部上半に本型式の末期的なパネル文が描かれている。２の深鉢形土器の文様は，刻みの施された隆帯とそれに伴う集合沈線や三叉文で構成されている。本遺跡で出土した井戸尻式期の中でも後出的な感がある。３の深鉢形土器は，藤内式期に盛行した円形磨消文が，井戸尻式期に残存したものである。４の大型の深鉢形土器は，交互刺突や刻みの施された２～３本単位の隆起線で器面が縦横に区画されている。５は鉢形土器であるが，３と同様に円形磨消文が井戸尻式期まで残存したものである。このような器形は井戸尻式期にはめずらしい。６・７は深鉢形土器の底部で，地文の縄文が観察できる。８は長胴形の器形と推定される，大型の深鉢形土器になる。刻みの施された隆帯で大柄な渦巻文等を施している。９は４単位の波状口縁をもつ小型の深鉢形土器である。波頂下に短沈線の施された卵形の突帯を貼り付け，さらに矢羽状の刻みと指頭押圧を加えた隆帯が付加されている。胴部には０段多条 RLL 縄文が斜位に施されている。10 は井戸尻式期に盛行する，立体装飾文タイプの深鉢形土器である。眼鏡状把手・低隆帯によるＳ字状渦巻文，櫛形文で人体状のモチーフを作り出している。11 は屈折底をもつ深鉢形土器である。屈折部より上には，０段多条 RLL 縄文を斜位に施している。

また土器の他には，打製石斧を中心とする石器の出土が目立つが，欠損しているものが多い。Ａ区土器集中部から出土した石器は，図８－１～８である。１～３は打製石斧で，それぞれの石材が，１はホルンフェルス，２は粘板岩，３は砂岩である。４は大型粗製石匙で，ホルンフェルス製である。５は中粒凝灰岩製の敲石と思われるが，磨製石斧の未製品の可能性もある。６は輝緑岩製の礫器である。７・８は磨石で，７は安山岩・玄武岩製，８は中粒凝灰岩製である。ちなみに９～15 はＡ区土器集中以外の，包含層などから出土した石器ある。９～14 は打製石斧である。このうち，９・11・12・14 がホルンフェルス製，10・13 が中粒凝灰岩製である。15 の磨石は，安山岩・玄武岩製である。

Ｂ区土器集中部と集石遺構

包含層を掘り下げる過程で，土器の集中する箇所が，Ａ区土器集中部の北側にもう１か所確認された（図４）。Ｂ区土器集中部としたこの部分は，Ａ区土器集中部に比べて，構成するそれぞれの土器片が小さく，また集中の度合いも劣る。遺構の掘り込みや窪みなどの下部遺構も確認することができなかった。

Ｂ区土器集中部の東に接して，集石遺構が発見された（図４，写真２－１）。遺構を構成する集石は，中粒凝灰岩・安山岩・細粒凝灰岩などの石材を中心とする，拳大の礫からなる。いずれの石も著しく被熱していた。集石の下部には，径 40cm 強で深さ 10cm ほどの浅いピット状の掘り込みが確認された。このような土器集中部と集石遺構

１．集石遺構

２．Ａ区土器集中部全景

３．土器集中部（微細）

４．土器集中部（微細）

写真２　縄文時代遺構

は，相互に有機的な関係を持って存在するものであろうか。あるいは土器集中部は，単に包含層中の土器が密な部分として捉えるべきであろうか。

ピット

ピットは，古代の住居址の周辺で２基が確認されている（図４）。いずれも浅いもので，層位や覆土の状況から，縄文時代中期のものであろうと思われるが，遺構の性格などは不明である。

５．まとめにかえて
ー調査の成果と考古学実習の課題ー

１）調査の成果

この発掘調査は，小さな面積で実施したにもかかわらず，各時代にわたる成果をあげることができた。時代別に見ると，第一次調査区における区画整理事業地内の調査成果によく対応している。７世紀中葉から第３四半期にかけての，古墳時代後期の竪穴住居址の年代は，第一次調査の古代の

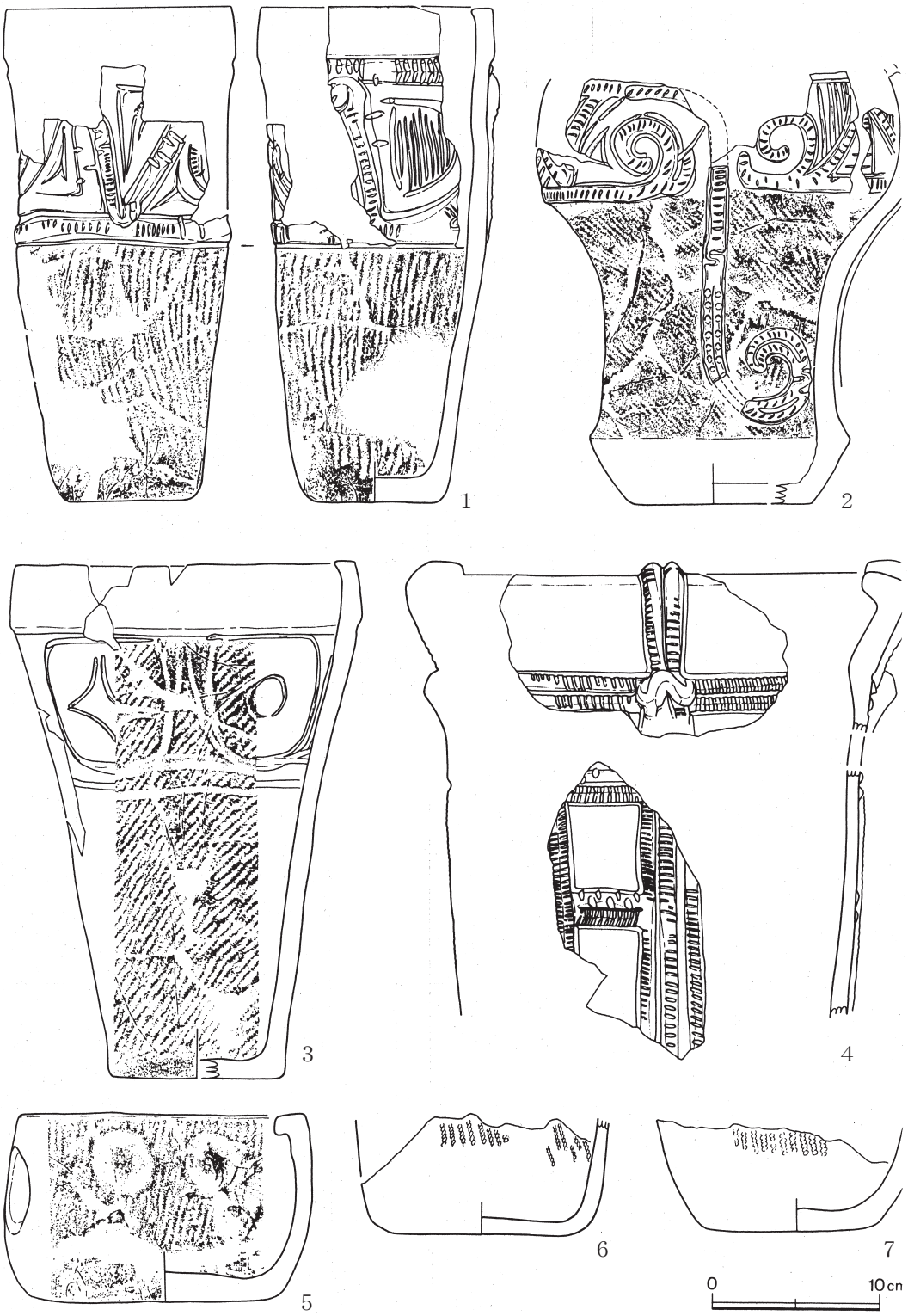

図６　Ａ区土器集中部出土土器１（1/4）

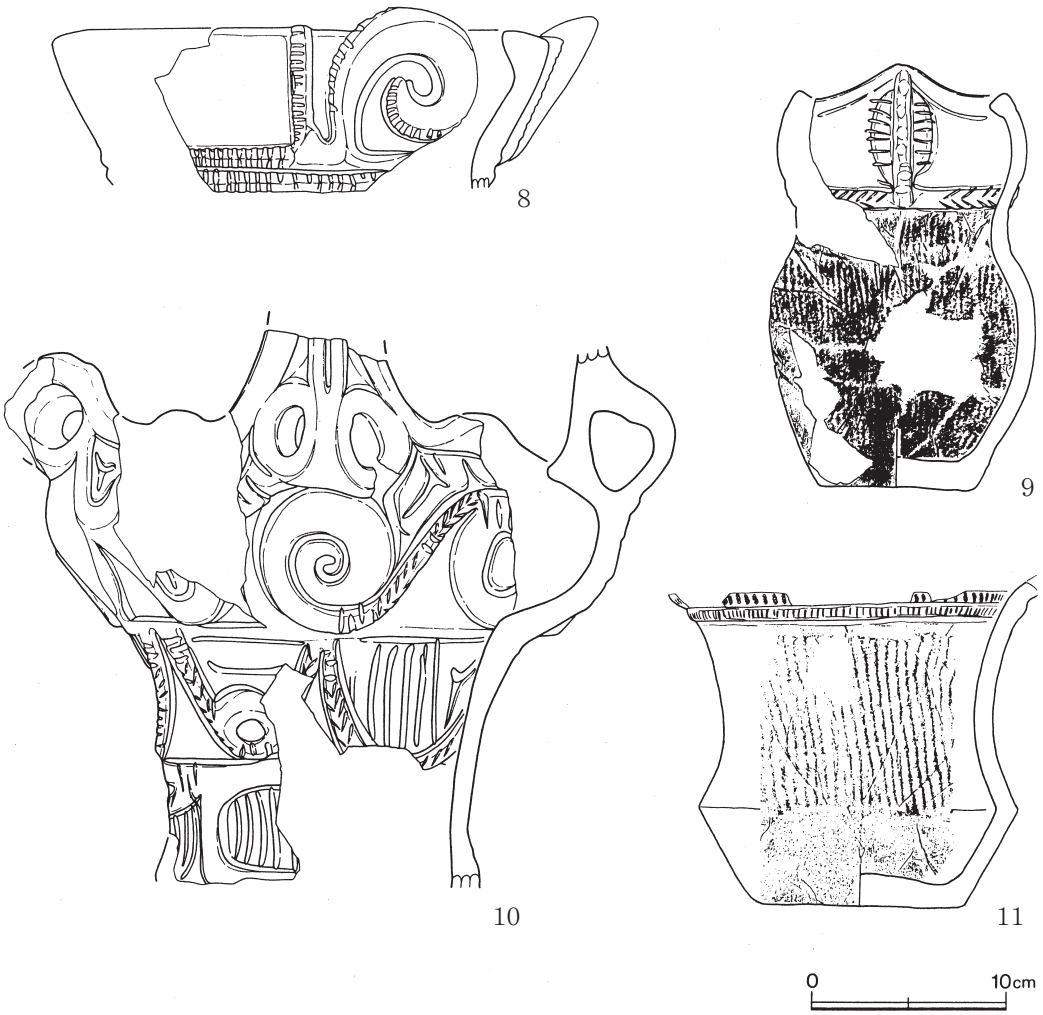

図７　Ａ区土器集中部出土土器２（1/4）

竪穴住居址よりも古く感じられ，今後，古代集落の時期的な占地を検討する上での参考となろう。

また，中世の遺構の広がりも確認することができた。第一次調査区では，14～16 世紀にあたる大型の堀跡が発見されており，中世海老名氏一族に関係する館跡の区画堀として捉えられている。本遺構ひとつでは何も語れないが，一般集落の一端か，あるいは館に付属する作業場的なものなのか，いずれにしても中世遺構が斜面下部に展開していることがわかった。

本調査地点で出土した縄文土器は，縄文時代前期前半から後期前半にわたるものであったが，ほとんどが縄文時代中期中葉の勝坂式に属するものであった。特にＡ区土器集中部では，井戸尻式（勝坂３式）に相当する略完形の個体が，折り重なるように出土した。出土した土器の全体的な傾向として，胎土に長石とみられる白色の小礫を多く含んだ軽しょうな土器片が多い。焼成時に変形した失敗品も同様な胎土を呈することから，大半が当地で製作されたものと考えられる。一方で，いわゆる〈中峠式〉と東関東系の加曽利Ｅ式が確認されており，興味をひく。

これらの土器を廃棄した母体となる，縄文時代の集落として捉えられる明確な遺構は発見できな

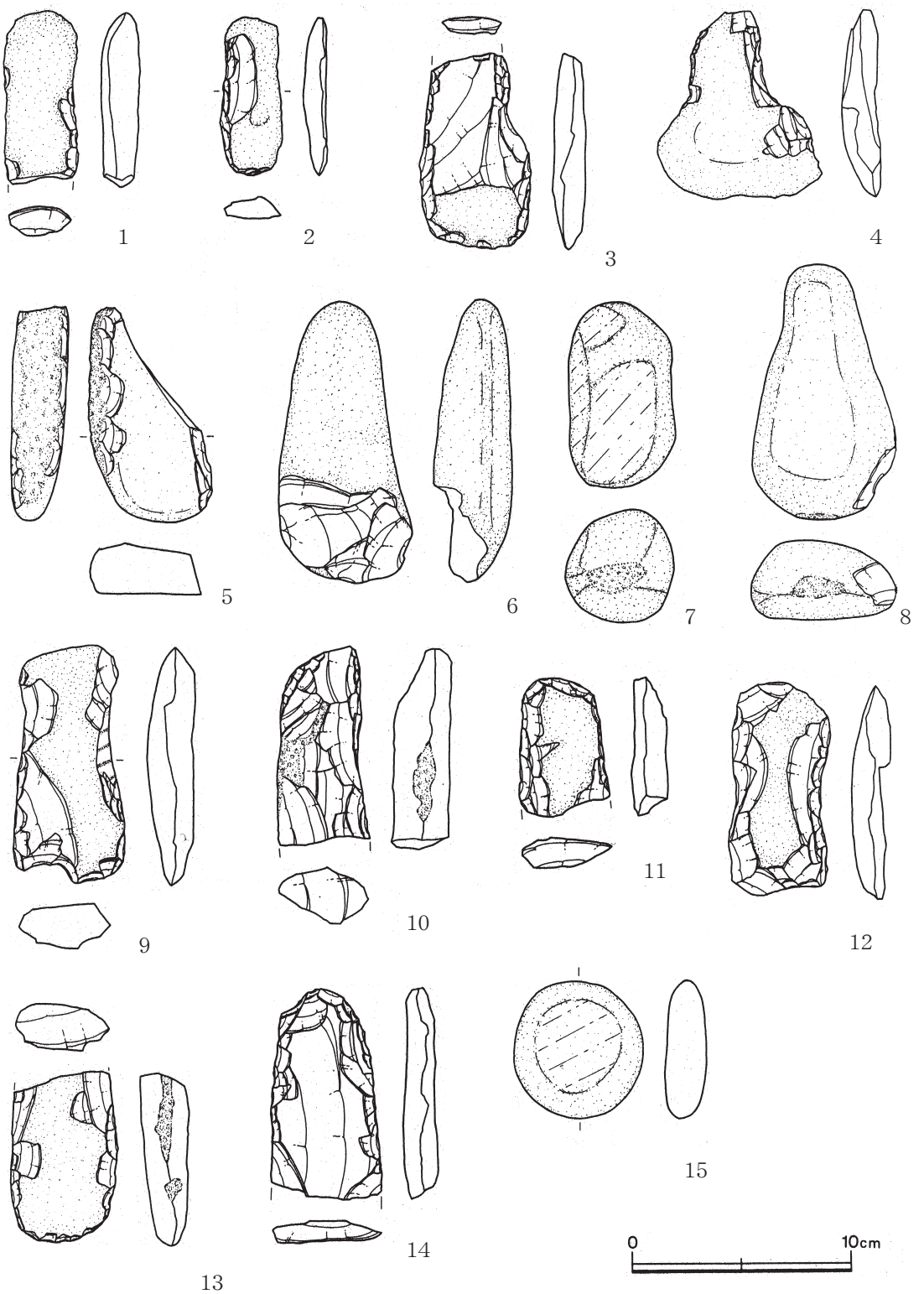

図８　出土石器（2/3）

1．掘り下げ・遺構確認作業

2．掘り下げ・遺構確認作業

3．Ａ区土器集中部検出作業

4．住居址平面図実測作業

5．平板測量・レベリング作業

6．平板実測作業

写真３　実習風景

かった。斜面上方の第一次調査区では，広い調査区内に縄文時代の遺構としては土壙墓と集石遺構が各１基ずつ発見されたにすぎない。土器も縄文時代前期・中期のものが少量出土しているに留まる。これと比較すると，本調査区がより当該期集落に近い場所にある可能性が考えられよう。『海老名市史』の記載では，海老名市内の縄文時代遺跡は大きく３つの地区に集中するとされ，そのひとつが望地遺跡・国分寺関連遺跡・上浜田遺跡など10遺跡がまとまる国分南地区である。大谷市場遺跡はこの地区に含まれるが，従来は縄文時代の遺跡としてはさほど重視されていなかった。今

回の発見で，縄文時代中期の集落が近隣に存在することがわかり，これは海老名市域座間丘陵中津原面の遺跡では，初めての例となろう。

以上のようにそれぞれの時代で興味深い成果が得られたが，これらの成果を基に，現在，第二次調査と第三次調査を併せた正報告書を作成中である。本稿で言及できなかった部分は，第一次調査の成果を踏まえて，また第三次調査の成果を盛り込んで再度明らかにしたいと考えている。

２）考古学事実習の課題

最後に，本学の考古学実習について触れておきたい。本考古学実習は，履修単位が１単位あるいは２単位のものなので，長期間にわたって学生を拘束するわけにはいかない。そのため，毎年４班ぐらいの班編成を組み，１班３日のローテーションで学生を参加させるようにしている。反面，考古学実習は，実習を行うのと同時に発掘調査の現場運営も行わなければいけないという宿命を負っている。また学生側にしても，多くの場合が考古学の基礎的な授業を受けていない学生が大半であるため，３日ごとに入れ替わる学生は，発掘現場で起こる常に異なった状況をその場その場で説明しても，よく理解できてはいないだろうということは容易に想像できる。また３日のローテーションであると，発掘調査や考古学に興味を持ち始めた途端に，あるいは発掘調査に身体が慣れ始めた頃に，終わりがきてしまうのである。もちろん，自由意志による継続参加は歓迎しているが，なかなかそこまでして参加しようという学生は少数に留まっている。

今後は，継続的に実施できる大学独自のフィールドを開拓したり，あるいは参加形態の工夫や事前指導のあり方などを検討していきたいと考えている。また実習で得られた成果や資料を，教室での授業に活かすような試みも行ってみたい。なお，大谷市場遺跡第二次発掘調査の遺物整理に関しては，洗浄・注記・接合の大部分を海老名市教育員会で行ったが，接合・復元の一部は授業の一環として三宅が東京家政学院大学において行った。本調査に関わる出土遺物・記録図面・写真類は，海老名市教育委員会において保管している。

末筆となりましたが，発掘調査にあたっては，土地所有者の山口智氏にたいへんご配慮をいただきお世話になりました。海老名市教育委員会文化財課ならびに文化財の担当者である押方みはる氏には，発掘調査に関する事務手続および調整等でご苦労いただきました。また，実習中および事後処理の調査に，遠藤仁（東海大学大学院生）・久世深雪（東京家政学院大学大学院卒）両氏の参加を得ました。記して感謝いたします。

なお，本稿をまとめるにあたり，出土した石器の実測・トレース・観察は中川真人氏（神奈川県城山町教育委員会）の手を煩わせました。また縄文土器の実測・トレースは，永瀬史人（青山学院大学大学院）・高橋大地（東京大学大学院）の両氏にお願いし，縄文土器に関する記載は永瀬氏にご教示いただいたものです。多忙な中で貴重な時間を割いていただき，御礼申し上げます。

平成 13 年度考古学実習参加者（50 音順）
有馬奈保子・石田直美・井上典子・井上真理絵・漆原奈央子・江頭由紀子・及川　静・加瀬谷博美・壁由里子・北川留里子・熊谷智子・小菅千絵・小林恵里子・小谷野幸江・近藤　葵・笹野啓子・島崎麻理・清水由香梨・関口智栄子・鳥海理恵子・中才紗哉香・中嶋裕子・中山佳永子・西野可苗・原亜希子・藤井綾子・益田有記子・三木　萌・矢部真由美・吉水淑恵

参考文献

海老名市　1998 『海老名市史１ 資料編 原始・古代』
海老名市教育委員会・大谷市場遺跡発掘調査団　2001 『海老名市 大谷市場遺跡見学会資料』
斎木秀雄　1985 「方形竪穴建築址について－鎌倉市内の分布と構造－」『諏訪東遺跡』諏訪東遺跡調査会
馬淵和雄　1991 「都市の周縁，または周縁の都市－いわゆる方形竪穴建築址による都市論の試み－」『青山考古』第９号　青山考古学会